

## 鼎談「次の世代へのバトンタッチ」

女川町役場 公民連携室長  
特定非営利活動法人アスヘノキボウ 代表理事  
女川町商工会 まちづくり推進役

青山 貴博 氏  
後藤 大輝 氏  
磯部 哲也 氏

(聞き手) 東北活性化研究センター 地域・産業振興部長 福地 裕明  
企画総務部 専任部長 國井 紀王士

東日本大震災からの復興は、国による「第2期復興・創生期間」が令和3年度からスタートしており、今後は復興まちづくり等、ソフト面の取り組みについても、さらに前に進めていく段階にあります。

その一助とすべく、本誌では、震災以降、復興に向けた地域再生や起業・新規事業立ち上げ等に取り組んできた企業やNPO、地域団体等の方々の現在、そして今後の展望等をご紹介しますこととしました。

今回は「復興のフロントランナー」と呼ばれている女川町の活動人口創出促進事業などについてお聞きしました。

一皆さん、自己紹介からお願いします。

青山：公民連携室という言葉どおり、女川町内の公(役場)と民間の様々な活動を調整するつ



青山貴博(あおやま たかひろ)氏

東日本大震災発生時は女川町商工会事務局長。復興まちづくりを提案する民間団体「女川町復興連絡協議会」の事務局として各種プロジェクトを展開。2019年から現職。

なぎ役をしています。もともとは商工会の職員です。縁あって役場にお世話になっており、今年で4年目です。

後藤：私が代表をつとめる「アスヘノキボウ」のミッションは、女川町の地域課題を解決することを通じて、日本と世界の社会課題解決に貢献することです。東日本大震災で被災された方々の再建のお手伝いや、女川町での起業支援を行ってきました。その後は町の復興のフェーズに合わせて、町の課題を解決する事業に取り組んでおります。

磯部：商工会に来て4年になります。主に町内のイベントの事務局や、商工会の本来業務である販路開拓といった業務のほか、公民連携室やアスヘノキボウの皆さんが、自分たちだけでやり切れないところを、お手伝いしています。

## 自分たちのことは、自分たちで

—「復興のフロントランナー」と呼ばれている女川町ですが、まちづくりということでは震災の前から先を見越して活動されていたと聞きます。震災前の取り組みについて伺えますか。

青山：2010年6月、女川町経済懇話会では地銀の調査部から講師を招き、女川の将来人口について話を聞きました。当時、女川町では人口が1万人を切る、切らないで騒いでいましたが、20年後の2030年には4割減るという話でした。この話を聞いていた商工会の高橋正典会長（当時。現・株式会社高政会長）が戻って来るや否や、「来たるべき6,000人問題に備えなければ」と、仲間や行政に声をかけて「女川まちづくり塾」という勉強会をつくりました。話を聞いてから立ち上げまでは半月足らずだったと記憶しています。この年の4月に商工会に着任したばかりの私は、ほかでは見られない迅速さに、女川の独特な行動力を感じました。

まちづくり塾では月に1、2回、産業だけでなく、教育や福祉など様々なテーマで話し合いました。なぜ商工会で様々なテーマを話し合ったかということ、人口が4,000人減るということは生産人口も購買力もともに減るため、産業のことだけ話し合っても仕方がなかったからです。また、まちづくり塾メンバーは、まちの顔役で

もあるので、PTA 会長や社会福祉協議会の役員経験者でもありました。こうした30人でおよそ一年間、ざっくばらんに来たるべき「6,000人問題」を話し合いました。

年度末を迎え、「今後、どう活動するか話し合おう」と言っていた矢先に東日本大震災が発生し、その後の活動は当然なくなりました。

—震災発生から約一カ月で、女川は復興に向けて歩みはじめました。

青山：一カ月後の2011年4月19日、女川町復興連絡協議会（以下 FRK）が立ち上がったのは、結果的には「女川まちづくり塾」があったからだと思っています。

まちづくり塾での検討は、「20年で人口が4割減っていくスピードをいかに緩やかにできるか」というものでした。100年後には日本全体で約6,000万人になるだろうと言われていたので、当然女川は、都市部よりも早く減るだろうと考えていました。

ところが、20年後に来たるべき問題が、津波によって前倒しになって、目の前にあらわれました。我々が検討してきたものの中に活用できるものはないか、と考えることができたという意味では、素地があってよかったと思います。

—ひとつのプレハブに複数の団体が入って過ごしたことで、お互いに深く理解しあったことも、復旧・復興のスピードアップに関連したとも聞きます。

青山：震災の翌日から、「世の中からプレハブが消えた」と言われる状況の中で、高橋会長が

伝手をたどり、プレハブを自費で持ってきて、当時女川町観光協会の会長だった鈴木敬幸さん（故人）の土地に据え付けたんです。

会長は「人が集まる場所をつくらなきゃ駄目なんだ」と言うのですが、私は最初、その意味が分かりませんでした。要は、足も自由に伸ばせない、気を遣ってせき払い一つもできない避難所では自由に話もできないだろうと、何をやってもいい「居場所」を作りたかったんですね。

会長の思惑通り、居場所にはいろんな人が集まり、夜中になっても帰らずにあれこれ話をしていました。そんな中、「この町、どうなるんだべね」という話になり、最終的には「自分たちでやらなきゃいけないんじゃないの」ということになりました。

— 「自分たちのことは、自分たちでやる」といった気概はこうして生まれたのですか。あるいは、素地は以前からあったのでしょうか。

青山：地理的に女川が「どん詰まり」にあったことが影響していると思います。女川から石巻に移住することはあっても、その逆は滅多にありません。つまり、女川の人たちは、昔から、自分たちのことは自分たちでやらなきゃいけない土地柄だったんです。

こうした気質を会長も分かっていました。人が集まることで、色々と話が弾んでいくうちに、結束力が生まれ、「自分らのことは、自分らで」という結論を導かせるために、プレハブが必要だったんだということが分かりました。

毎晩のようにプレハブでの話を報告していたら、案の定会長は「そうだな」と言うわけです。そして、「ひとつ、組織を作りたいんだ」と。

それがいわゆる FRK です。

ですから、プレハブに商工会や観光協会など4団体が同居したのは副次的なものです。ただ、狭いプレハブだったからこそ、物理的にも心理的にも距離が縮まっていったんですね。あらためてお互いを知る機会となり、そこで結束が生まれていきました。

—磯部さんや後藤さんが加わるのは、このあとのことだと思いますが、どのように関わっていったのでしょうか。

磯部：震災当時、私は仙台にいました。転勤で女川に来て、初めて聞いたことも多かったです。ですので、こうした活動を知るようになったのは、町の中に関わるようになってからです。当時は、「関わりたいけれども、どうしていいか分からなかった」というのが本音です。



磯部哲也（いそべ てつや）氏

公民連携事業、イベントの運営、水産加工業の販路拡大などの活動に携わる。第二期女川町復興連絡協議会事務局長。2018年7月より現職。

後藤：私がボランティアに入ったのは南三陸町でした。大学のつながりです。2015年の夏に、「創業支援のプログラムがある」と聞き、はじめて女川を訪れました。そこでアスヘノキボウの

創業者である小松洋介さんに話を伺い、青山さんをはじめ多くの女川の方々と出会い、惹かれました。



**後藤大輝(ごとう たいき)氏**

大学生時代に女川町と出会う。日本・世界の未来は女川にあると信じて移住。2022年4月、代表理事に就任。

**青山：**女川には、大輝くんのように何らかの縁があって来てくれて、結果、女川を気に入ってくれて、今も付き合ってくれている人がたくさんいます。本当にありがたいです。

**磯部：**縁がなかったら、全然女川を知らないままだったかもしれないね。

**後藤：**当時、僕は大学3年生でしたが、女川のまちづくりにすごい衝撃を受けました。このまちづくり自体をもっとたくさんの人に知ってほしいと、独自に毎月2回、東京から女川に大学生を連れてくるツアーを行いました。すると小松さんから、「だったら、アスヘノキボウ(の企画として)やってみない？東京との行き来の負担も減るよ」と誘われました。そのころ私は大学4年で、もともとの夢に進むべきか悩んでいました。結局、「復興途中の今だからこそまちづくりのプロセスに関わりたい。まちができた後で関わっても面白くない」と、その年の10月

にアスヘノキボウに入社しました。

**青山：**大輝くんが学生を連れて来るたびに「すごいな、こいつ」と思っていたけれど、まさか勤めるとまでは思わなかったね。

**後藤：**単純にみなさんの話に感動したんですね。こんなに格好いい大人たちが、女川のまちづくりを担っていて、そのまちづくり自体も面白い。本気の人たちの力になりたいと思いました。当時は、みなさんの「どんな町をつくりたい」や、「どんな事業を創ろうか」などといった話の場に入っていくことが、とても楽しくて、大変だったという記憶がありません。忙しすぎて、かつ新卒一年目で「いくらやっても終わらない」といった時もありましたがすごく楽しかった記憶があります。

**青山：**あの頃は過渡期というか、そもそもアスヘノキボウはFRKの戦略室を切り出して作った、肝いりの組織です。前例のない立ち上げでもあって、小松前代表が熱意を持って関わり、それを町関係者が全面的にバックアップしているわけです。女川に必要なからこそつくったものなので、期待も大きかった。だから、まちの人からは、「やって当たり前」「やらなきゃ怒られる」という感じだったね。

**磯部：**「若い奴が何をやっているんだ？」などと、毎日のように言われていたね。

**青山：**やることなすことすべてが女川の将来に関わる重要なものなので、アスヘノキボウがコケると、町や民間の計画・方策が全部狂うわけ

です。だから結構風当たりも強かったですが、万が一のときは我々が弾除けになりました。でも、その時期を超えたからこそ今があるわけだし、まさか大輝くんのことを後藤代表と呼ぶ時が来ようとは。

後藤：僕も思っていないませんでした。

## 女川を好きになってくれる人を増やす

—それでは、女川町における「活動人口創出」についてお聞かせいただけますか。

青山：活動人口の定義ですが、今ここに住んでいる人のほか、この町に遊びに来る人、視察に来る人、こうやって取材に来る人など、そういった人たちが何らかの目的を持ってこの町に来て、それらを実現する。まさに、そういった人たちを総称して活動人口と定義付けています。こうした人を増やす主体が、まさに我々なんです。「活動人口創出」というベクトルは同じですが、動き方や役割が違うということです。



### 創業本気プログラム

アスヘノキボウが実施する創業支援は、創業場所を女川と限らないのが特徴。

震災後、数々のスタートが生まれた女川町だからこそできる学びを提供。

後藤：2013年4月にNPO法人化したアスヘノキボウは、開設当初は創業支援の活動の傍ら、復興関連イベントのボランティアなど、何でも屋のような側面もありました。復興が進むにつれて町の課題に取り組むことになりましたが、中でも重視しているのが人口減少の問題です。全国的に人口が減っていく中、女川だけが増えるという未来は想像しづらい。人口が減る前提で持続的な地域をつくるとなると、女川町内だけで課題解決するのは難しいだろうと、外の皆さんの力を借りて、女川に来てもらう人、さらには、女川を好きになってくれる人を増やしていこうと「活動人口を増やそう」という流れになりました。僕自身、本気で女川のことを好きになって、一緒に関わってくれる人が増えたら嬉しいという思いでやっています。

—それでは、今メインで取り組んでいる事業についてお聞かせください。

後藤：柱が3つありまして、中でも「お試し移住」がメインです。このほか「企業研修」や、最近始めた「女川つながるミーティング」があります。

活動人口を増やすためには、繰り返しになりますが、「女川に関わることで女川の人たちが好きになり、自分のライフスタイルもより良くなる」と感じてもらえるようになってくれることを目指しています。

そのためにまず、お試しで一週間程度女川にお試しで滞在してもらい、どっぷり町の人と関係をつくっていただくことはじめたのが、「お試し移住」です。

単なる観光では地域の人と関係をつくるのは



### お試し移住

アルバイトやインターンを通じ、地方で働く醍醐味を味わうとともに、地域の課題について考える機会にもなります。

難しいですが、一週間も女川に滞在すれば、飲み屋などで町長やまちのキーパーソンたちと言葉を交わすことができます。そこで会話することなどで、より深い関係が築けます。ただ、私たち民間だけで住居を手配することは難しい面もあり、町と連携し公営住宅を使わせてもらうなどして運営しています。

これまで6年間で550名以上の方が「お試し移住」に参加し、女川のファンになってもらっています(22年3月末現在)。中には、保育士さんが移住したり、テナントに出店したりなど、移住や起業に至った方もいます。

「企業研修」は、特に大企業の研修を女川町で実施しています。内容は、復興の歩みなど学ぶ人材育成型と、女川という地域社会で新しいビジネスを考える事業開発型の2つがあります。

**青山：**最初に受け入れた頃は、「震災当時の状況」や「防災、減災の考え方」といったニーズが多かったのですが、時間が経過するにつれて、「復興のあり方」「女川の復興まちづくり」などとテーマが変わってきています。

**後藤：**青山さんらの話にみんな感動して心が動かされ、中には、もっと女川に深く関わって何かチャレンジしてみたいと、期間限定で社員を常駐させる企業も出てきました。

**青山：**「企業がなぜ女川で、まちづくりをテーマに研修するの？」と思うかもしれませんが、企業から見ると、私たちの公民連携のまちづくりが、自分たちの会社の組織づくりの参考になるんですね。東京から大企業がこぞって女川に人材を派遣するということは、そういうことだと思っています。こうした動きは震災がなければなかったかもしれません。でも、これをきっかけに今まで女川にはなかったことを教わり、反対に、彼らにないものを教えることができる。このつながりのあり方を大事にしたいと思いますし、その中心を担っているのがアスヘノキボウでよかったと思っています。

**磯部：**ですから、研修に来る企業には「女川を使い倒してほしい」とお願いするとともに「私たちもあなた方を使い倒すからね」とお話しさせていただいています。

**後藤：**女川の課題は日本全国の課題にも通じるということで、女川の取り組みを外に広げるビジネスを展開しようというコンサルティング会社と女川町が「次世代のまちづくり推進に関する包括連携協定」を結びました。

**青山：**この協定には、まずは行政改革から始めようという町長の考えが反映されています。改革がうまく進めば、行政のDX、さらには地域のDXにうまく繋げていこうと考えています。

これもアスヘノキボウが内と外をつないだ結果です。

**後藤：**3つ目の「女川つながるミーティング」は、これまで繋がりのある自治体や企業とあらためて交流しようと今年の2月にはじめました。これまでは僕らが招かなくても、復興のために外から皆さんが来てくれましたが、これからはそうもいかないのので、自分たちからアクションを起こして関係を継続させ、お互いに価値のある場を作ることにしたものです。新しい事業やさらなる復興に向けた取り組みなど、さらにつながりが深まればと思っています。

**磯部：**復興まちづくりの中心でやってきた人たちはもちろん、自分たちの本業を第一に考えなければいけませんから、これからは、役場や商工会、アスヘノキボウが音頭を取らないと物事は進まないと考えています。ここがしっかり機能しないと、震災前に戻ってしまうという危機感は絶えず持っています。

**青山：**そうやってチグハグ、バラバラの方向を向くようになったとしても、みんなが当たり前で暮らせる状態であれば、それが本当の復興なんだろうな、と最近思うようになりました。

**磯部：**たぶん、そうですね。我々が何もしなくてもいい状態が本当の復興かもしれません。それに、我々の世代もあと10年たらずで「口を出さない世代」になります。これからは後藤さんたちの出番だから、口出しを控えるようにしないと。

**後藤：**まだまだ出してほしいです。



JR 女川駅から海に向かってまっすぐにのびるシーパルピア女川のれんがみち

## いかに次の世代へバトンを渡すか

—FRK の中心を担っていた人たちからの代替わりが既に始まっているということですか。

**青山：**そうです。いい感じでバトンタッチできていると思っています。

**磯部：**課題は、町に若い人が少ないことです。

**青山：**確かに、数は少ないけれども、彼らは若いうちから我々に巻き込まれているから、必然的にやらなきゃいけないという認識は持っていますね。自覚もあるみたいです。

**磯部：**7月(24日)に「みなとまつり」を12年ぶりにやることになりました。かつては商工会の役員や各団体の長らによる協賛会にて運営していましたが、震災後初めて、しかも12年ぶりということもあって、ノウハウも途絶えています。そこで今回はアスヘノキボウにお願いして、町内の若者のほか、町に移住してきた人など20名程度を巻き込んで、彼らの得意分野から携

わってもらふことにしました。

—青山さんらの世代から後藤さんらの世代へ引き継ぐ中で期待していることは何ですか。

青山：これをやってほしいということは特にありません。素地というか、原理原則さえ守ってもらえれば、これまでやってきたことを壊しても構わないと思っています。

ただ、願いがあるとすれば、我々の子どもたちの世代(中高生)に、我々が大輝くんらに引き継いだレベルでバトンタッチしてほしいです。大輝くんから見れば、ひとまわり下の世代に、最低でも現状レベルで引き継いでもらわないと、(まちは)続かないと思うから。

磯部：我々がやってきたことを真似しろということではなく、まちを良くするために何が大事かという本質を見極めてほしいです。現在、まちがどんな流れで運営されているかを観察した上で、実践してもらえればと思います。

—バトンを受け継いだ立場の後藤さんはどう感じていますか。

後藤：僕は女川と出会って人生が変わりました。女川で関わってきた方々の、女川に対する愛情とか、「地域をどうにかしたい」という思いに惹かれ、途中から関わっていますが、こうした皆さんの思いを引き継ぐとともに、その思いを一緒に背負っていける人をできるだけ多く増やしたいと思っています。

ただその一方で、女川の人口は減っています。仕事の選択肢や住環境を整備しなければ、女川

に戻りたくても戻ってこれないといったケースもあるため、若い人たちが地域にいられる理由をつくるのが課題だと認識しています。

—ほかに何か考えていることはありますか。

後藤：アイデアベースでやりたいことは、いわゆる山村留学です。一般的に小規模の小中学校は1学年1クラスで、クラス替えがありません。そうすると6年間、下手をすれば9年もの間、人間関係が変わらないわけです。そうすると、生きづらさを感じる子どもも出てくるでしょう。そこで、他所の地域からの子どもたちを受け入れる山村留学を導入し、長期間ではないにせよ、より多くの子どもたちと地元の子が交わることで弊害を解消できないかと考えています。外の子と交流することで、地域の良さを見つけてもらいたいとも思っています。これまでには学生や社会人を中心に取り組んでいますけど、将来的には子どもたちの環境にも関わっていきたいです。

青山：大輝くんが言うように、子どもたちをいい意味で競わせる、刺激を与えることは大切です。女川町が施設一体型の小中一貫校を選択したのも、まさにそういうことです。復興まちづくりの発想には当然ながら、子どもたちの将来をも見据えています。

FRKの設立総会で高橋会長が突然、「還暦以上は口出さず」と宣言しましたが、その真意もまさに、ここなんですよ。まちの重鎮らも賛同して、我々の世代は戸惑いました。だって、何もかも失ったまちで「お前らに任せる」と言われたわけですから。会長は私たちに「復興は

10年、20年かかるだろう。その頃、我々は生きていないかもしれない。だから、任せるんだ」と言いました。そして、「何もかもなくなったのは分かってるけど、あんたたちには、ちっちゃい子どもがいっぱい（いるだろう）」と続けたんです。会長は「子どもたちのために、どんなにキツくてもお前たちがやらなければならない。これは、年寄りがやることじゃない」というわけですよ。

こんな胸が熱くなるようなこと言われてしまったら、「分かりました」としか答えられませんでした。もちろん会長からは、「口出しはしないけど弾除けにはなる。困ったら相談してほしいし、一緒にやろう」と言ってもらいましたが…。

—こうやって話を伺うだけでも胸が熱くなりますね。「還暦以上口を出さず」という話にはそんな真意が隠されていたんですね。

青山：子どもには可能性があり、次を託せるのは子どもたちです。その考えがちゃんと大輝さんに伝わっていたので安心しました。ぜひ実現してもらいたいです。

—ありがとうございました。

(令和4年6月30日、女川町まちなか交流館にて)

令和3年度より、アスヘノキボウでは「活動人口創出」を目指す女川町からの受託を受け、コロナ禍というピンチをチャンスに変え、常に新しいことに挑戦し続ける女川町の元気な人たちや話題のスポットを紹介する動画「ONAGAWA enJOINUS（オナガワ・エンジョイナス）」を制作。本年7月までに4本の動画が公開されました。動画制作には町内企業の若手有志が参加しています。



アスヘノキボウ YouTube  
チャンネルでご覧いただけます。



[https://www.youtube.com/channel/UCIFBfjv\\_4B-OeqBF6sf3IWA](https://www.youtube.com/channel/UCIFBfjv_4B-OeqBF6sf3IWA)